世界を元気にした人は、中部も元気にできる。
JICA中部は、あなたの参加を待っています。

JICAボランティア*を経験し、帰国した人は約3万8,000人。
彼らはいま、世界の諸問題に対応してきた経験を日本の各地で活かし、活躍しています。
JICA中部では、中部エリアで活躍する5人に注目。
それぞれの地域、分野、活動に欠かすことのできない存在となっています。
帰国後の不安を考えるより、開発途上国でのさまざまな経験を
日本でどのように活かすのかを視野に入れ、その興味を、好奇心を行動に移してください！

世界を元気にした人は、中部を、そして日本も元気にできる。
海外でのボランティア活動は「世界も、自分も、変えるシゴト」。
さぁ、あなたもJICAボランティアに参加してみませんか？

*JICAボランティアとは、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、
日系社会青年ボランティア、日系社会シニア・ボランティアの総称です。

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！

▶P7-8

古川 浩一さん

現在の勤務地 岐阜県大垣市
（情報科学芸術大学院大学）

◎青年海外協力隊経験者
（シリア／視聴覚教育）

▶P1-2

小林 浩樹さん

現在の勤務地 静岡県藤枝市
（大久保キャンプ場）

◎青年海外協力隊経験者
（パナマ／農業協同組合）

▶P9-10

大西 かおりさん

現在の勤務地 三重県多気郡
（大杉谷自然学校校長）

◎青年海外協力隊経験者
（フィリピン／理数科教師）

▶P5-6

窪田 保さん

現在の勤務地 愛知県名古屋市
（KTC中央高等学院教員）

◎青年海外協力隊経験者
（モザンビーク／理数科教師）

▶P3-4

久保 真希子さん

現在の勤務地 愛知県豊橋市
（愛知県教育委員会東三河教育事務所 語学相談員）

◎日系社会青年ボランティア経験者
（パラグアイ／日本語教師）

独立行政法人 国際協力機構　中部国際センター（JICA中部）
〒453-0872 愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60-7
www.jica.go.jp/chubu/

JICAボランティアに関するお問い合わせは
◎JICA中部ボランティア班
052-459-7229

JICA ジャイカ

世界も、自分も、変えるシゴト。

日本も元気にする 海外ボランティア in 中部

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！

山間地域が元気になれば、藤枝が元気になる、そして日本も元気にできる。

小林（こばやし）　浩樹（ひろき）

山間地域活性化プロデューサー／大久保グラススキー場指導員、青年海外協力隊経験者（パナマ・農業協同組合）

人口の減少や高齢化が進んでいるといわれる日本。多くの自治体が地域活性化としての村おこしに取り組んでいます。静岡県藤枝市の山間地域に位置する瀬戸谷地区も例外ではありません。青年海外協力隊としてパナマ共和国で活動し、先住民族自治区の農業協同組合育成指導につとめた小林さん。帰国後、瀬戸谷地区にある大久保グラススキー場のインストラクターをしながら、協力隊時代の行動力と経験を活かして、**山間地域活性化プロデューサー**として活躍しています。

海外研修で出会った仲間が途上国のボランティアで活躍する姿に影響を受け、青年海外協力隊に参加したという小林さん。赴任先のパナマ共和国では、先住民族のノベ族とともに、勤務経験のあった日本の農協をヒントにした流通システムの構築に取り組みました。

➔日本の農協のシステムを伝授。

赴任先のパナマ共和国では、先住民族自治区で農業協同組合の育成指導をしていました。ノベ族という民族なのですが、社会とのつながりが浅く、お金という価値観が薄かったんです。貨幣経済の歴史が短いため、**どうやって組合経営について基本的なことを伝えるか**ということから始まりました。運営資金が乏しいなかで商売をするということを考えたときに、ちょうど日本の農協は「委託販売制度」という、物を預かって売り、その代金を返すというシステムだったので、そのシステムを彼らに伝えました。仕入れのお金がなくても物が売れるということは十分伝わったかな、と思っています。

語学の習得は大変苦労しました。多分、同期の（協力隊員の）中でも現地語のスペイン語ができなかった方だと思います。ただ先住民の方々とのコミュニケーションは、すごくよくとれていました。なぜかというと、先住民の人達もスペイン語が苦手の方が多く、**お互いに一生懸命伝え、一生懸命聞こうとしたことで、気持ちが通じ合えた**からだと思います。

時間にルーズだったり、約束を守らなかったり、文化の違いに戸惑ったこともあるのですが、時間はそれぞれの生活の中で生まれるものです。たとえば、彼らは家族を中心に考えるのですが、日本人は仕事を中心に考えます。私が思っている時間と、彼らの思っている時間は違うんだということがわかると、あまり気にならなくなりましたね。よく約束をやぶられましたが、今度はどんな言い訳かなと、それを想像するのがおもしろくなってきて、楽しく活動できるようになりました。

パナマで農業協同組合育成指導員として活躍する小林さん

帰国した小林さんは、インストラクターとして瀬戸谷地区にある大久保グラススキー場に勤務しながら、協力隊時代の経験を活かし、山間地域活性化プロデューサーとして「せとやコロッケの会」を設立。小林さん自ら会長となります。

➔売りたいのはコロッケではない。

協力隊に参加する以前、スノーボードの大会を目指していたのですが、そのオフトレーニングとしてマウンテンボードをしていました。私が帰国したときは、ちょうどバブルが崩壊した直後。マウンテンスポーツの場が次々と閉鎖されていたのです。唯一、私の地元である大久保グラススキー場が残っていて、**ここをなんとか盛り上げよう**と、毎週、ボランティアで、スクールや大会を開くうちに、お客様が少しずつ増えて成果があがるようになってきました。併設するキャンプ場も手伝ってほしいという依頼を受けて「山の音楽祭」を企画。南米の音楽「フォルクローレ」を山々に響かせたコンサートは大成功し、それが評価の一つとなって、地域活性化プロデューサーとしてグラススキー場と契約することが決まりました。

イベント広場では朝市も開催

せとやコロッケが販売される藤の瀬会館

とはいえ、山奥に人を集めることは難しく、グラススキー場だけではその魅力は伝わりません。瀬戸谷地区に何か共通する魅力を探したところ、ちょうど3つの「せとやコロッケ」が開発されていました。そこで**「せとやコロッケの会」を設立**。3つの販売施設で協力して情報発信するようになりました。

コロッケを売りたいのではなく、コロッケのある瀬戸谷をいかにアピールするか。それが私たちのテーマ。まず来てもらって、その土地のことを知ってもらい、ファンになってもらうことで、商品は売れていきます。パナマでの活動中も、ノベ族の文化をきちんと知ってもらうことで、パナマの人たちに商品を買ってもらい、使ってもらうことができると考えていました。

こうした活動は**協力隊の事業そのものというか、その延長線上のことだ**と感じています。もしかしたら、パナマより日本の方が、簡単に言葉が通じるだけに難しいのかもしれません。先住民族の文化や生活などの変化は少ないのですが、日本は伝統が何代も引き継がれるなか社会的変化も大きく難しさもあります。**海外で乗り越えてきたのだから、できないわけがない**というのが、いまの自分のエネルギーになっています。

将来、子どもたちが山間地域で働き、生活できる基盤をつくりたいと話す小林さん。その行動力が「せとやコロッケ」をはじめとする地域活性化の種となり、いま実を結んでいます。

➔山も、茶畑も、すべて藤枝の宝。

山の魅力を町の皆さんにも伝えようと、岡部町との合併を機に、ご当地グルメである「岡部焼きそば」とあわせた「コロッケ焼きそばパン」を作りました。しかし、焼きそばパンを作るだけでは、どこでもできる話で、地域間の交流もありません。何かしようと考えて、せとやコロッケと岡部焼きそばの「結婚式」を開催。結婚式という**イベントのおかげで、みんなで一つのものを作り上げたという達成感につながり、より多くの人に知ってもらうきっかけに**もなりました。

よくアイデアマンと言われるのですが、アイデアは地域の皆さんが持っています。私は皆さんから話を聞いて、それを具体化しているだけです。「昔はよかった」と地元の人からよく聞くのですが、じゃ、なんで昔はよかったのかと聞けば、昔は藤枝の産業であるお茶が元気で、茶畑で働く男衆はみんな輝いていたそうです。町の女性が茶摘み娘として茶畑を訪れて、そこで愛が生まれたという話がでてきて、それなら茶畑で愛の告白をしたら盛り上がるのではないかと、全国的にも話題になった「茶畑の中心で愛を叫ぶ」というイベントを企画しました。イベントのおかげで、藤枝の茶畑の風景をテレビに映してもらえる、それこそ、まさに伝えたいことなんです。

茶畑は藤枝の宝です。お茶は飲むだけでなく、香りを感じたり、風景を楽しんだり、五感で楽しめるもの。これからも瀬戸谷の魅力を伝え、藤枝や静岡の山間地域を盛り上げたいと思っています。

計画したら必ず実行してください。計画が成功しても失敗しても、その人の、そして地域の成長につながります。成長は必ず他の人にも伝わるので、とにかくやってみることが大切です。協力隊に興味を持った人は、必ずアクションを起こしてください。そうすれば自分の成長につながり、その成長が途上国の人に伝わると思いますので、ぜひチャレンジしてください。

小林さんが働く大久保グラススキー場とキャンプ場、せとやコロッケも発売中！

みんなで遊びにきてね！

小林さんは、こんな人!!

藤枝市長　北村正平 氏

私たち藤枝市は、市政の基本理念として「元気なまち藤枝づくり」を掲げています。2009年には岡部町と合併し、新藤枝市としてスタート。この合併により、藤枝市の面積の約7割が中山間地域になりました。そのため、中山間地域が元気になることで、藤枝市も元気になると、中山間地域の活性化に積極的に取り組んでいます。その中で、小林さんは「藤枝コロッケ焼きそばパン」の企画や「茶畑の中心で愛を叫ぶ」というイベントの企画など、すばらしいアイデアと行動力で地域をリードし、中山間地域から市街地へ元気を発信してくださっています。小林さんの活動は、必ず藤枝市を、日本を、元気にすると信じています。私たちとともに「元気なまち藤枝づくり」「元気な国、日本づくり」を目指して、これからも活躍を期待しています。

子どもと、その環境を理解した日本語教育で、外国籍の子どもたちの支えになりたい。

東海地方には在日ブラジル人の半数以上が住んでいます。中でも自動車関連の工場が多い愛知県東三河地域には、ブラジル人をはじめとする数多くの外国人労働者が家族とともに生活しています。その東三河で、日系社会青年ボランティアとしての経験を活かして、**語学相談員**として活躍する久保さん。小中学校で日本語教育を必要としている外国籍児童・生徒の役に立ちたいとの想いから、小学校教諭の免許を取得中です。派遣先で得た「生きた経験」を通した教育指導に奮闘しています。

久保 真希子（くぼ まきこ） ← 愛知県教育委員会 東三河教育事務所語学相談員、日系社会青年ボランティア経験者（パラグアイ・日本語教師）

大学院時代に日系ブラジル人の子どもへの日本語教育に関心を高め、現地で日系社会や日本語教育事情について知りたいと考えた久保さん。日系社会青年ボランティアの日本語教師として、パラグアイへ派遣されました。

→ 研究から実体験の場へ。

大学院では、日本語教育について研究し、特に日系ブラジル人の子どもへの日本語教育をテーマとしていました。実際に**日系ブラジル人社会を訪ねて、日系人社会や日本語教育の実状を知りたい**と考え、日系社会青年ボランティアの日本語教師に応募。日系日本語学校の日本語教師として、ブラジルとの国境に位置するパラグアイ共和国のアマンバイ県に派遣されました。そのため、日本語教育の対象も、ブラジル人、パラグアイ人、日系ブラジル人と幅広く、主に6歳から15歳の日本でいう小中学生の子どもたちの指導にあたりました。

日系社会青年ボランティアとしてパラグアイで活躍する久保さん

現地での交流も大切な活動のひとつ

現地で日本語を教える先生はすごく少ないんです。さらに、日本語学校にいる先生たちの日本語力は、日本語教育でいうと初級ぐらい。まず現地の先生たちの日本語力のブラッシュアップからはじめました。子どもたちを指導する際に、どのように日本語を教えるか、そのための指導案の作成や教材の準備、カリキュラムの作成方法なども指導しました。また、毎月、季節の行事も行っていたので、日本の文化があまり残っていないところで、日本の文化をどうやって伝えるかということにも取り組みました。

価値観の違いには驚きましたね。私は、テストは一人でやるものと思っていましたが、パラグアイの子どもたちは、よそ見をして友達と協力して回答しようとするんです。テスト中に先生に「これあってる?」と聞くのも当然のことなんですよね。協力して答えを出すということは評価してあげたいのですが、それではテストにならないし、学力もついていかない。結局は一人だけでやるテストと、みんなで一緒にやるテストをつくるという折衷案で解決しました。そのために、子どもとも、先生とも、何度も話しあいましたね。

パラグアイでは、学校の内外を問わず、いろんな人と気軽に話し、地域や日本人会の集まりや行事にはできるだけ参加するようにしていました。**一緒に活動するうちに、現地にあった方法が自ずと見えてきた**という感じです。現地に行ってみないとわからないことがいっぱいあるので、あまり意気込みすぎず、いろんな選択肢から状況にあわせて、現地にあう方法を選んでいくといいですね。

帰国後、久保さんは、日系社会青年ボランティアでの経験を活かし、愛知県教育委員会東三河教育事務所で、ポルトガル語の語学相談員として活躍しています。

→ 東三河地域の小中学校を巡回。

帰国後は語学相談員として、豊橋市をはじめ、東三河地域の4市1町にある、外国籍の児童・生徒が在籍している小中学校を巡回し、日本語教育や教科指導をしています。祖国を忘れないために、母語や母文化を一緒に勉強することもあります。

子どもたちや保護者と話すことも語学相談員の大きな役割の一つです。子どもたちは、日常的に同じクラスの子どもたちと話しをするので、日本語の上達は早いのですが、外部との関わりの少ない保護者の多くは日本語が上達しにくい環境にあります。各学校にも言葉のわかる先生はいるのですが、成績のことや学校生活のことなど、細かなニュアンスまで理解するために、通訳として保護者と先生の間に入って、意思疎通のお手伝いをすることもあります。

保護者会では通訳として意思の疎通をサポート

国際担当の先生と協力して行う教科指導

教科指導のときに学校で使う日本語は、日常会話とは違って特別な単語も多いんです。どうやってわからない言葉を理解して問題を解くかというのは、日本語教育とは別のものなので、どのように支援するかは難しい問題です。外国籍の児童・生徒は一般学級でも学びますが、母語指導をはじめ、特定の教科では「取り出し」といって空いている別の教室で指導します。それを担当するのが国際担当と呼ばれる先生です。私たち語学相談員は、主に国際担当の先生と協力して子どもたちの指導をします。

私が学校の教員ではないので、教科の内容がわからず、答えに自信がないこともあって、そういうとき学校の先生たちに、外国籍の児童・生徒にどう関わっていただくのかが、これからの課題です。

外国籍の児童・生徒の指導には、日本語教育だけでなく、母語指導や教科指導、そしてカウンセリングが必要だという久保さん。派遣先で得た「生きた経験」を通して、異文化を持つ子どもたちの中に飛び込み、日本での生活を支えています。

→ 日本語教育の専門性を深めたい。

子どもに接する時間が長くなるほど、子どもへの教育の専門的な知識を深める必要があると強く感じ、帰国後、すぐに通信教育の小学校教諭免許取得課程に入学しました。

私にとって、小学校の先生になりたいというのがゴールではありません。小学校教諭の免許を取得しようと考えたのは、日本語教育をさらに専門化するという目的以外に、**義務教育という大切な時期に日本語教育を必要としている子どもたちの支えになりたい**と思ったからです。

私の中で何を芯として活動しているかといえば、日本語教育なんですね。おでんにたとえるなら、おでんの串が日本語教育です。そこに何が刺さっているかといえば、子どもであったり、日系社会であったり、中南米であったり。そのおでんがどこにあるかといえば、公立の小中学校なのです。つまり、子どものこと、日系社会や中南米のこと、そして小中学校のこと、語学相談員には幅広い知識と経験が求められています。

外国籍の児童・生徒の指導は、日本語教育だけではありません。母語指導や教科指導、カウンセリングなどの役割も果たさなければなりません。子どもを対象とした日本語教育には、子どもとは何か、子どもを教えるとはどのようなことかという概念も必要となってきます。そのために小学校教育の方法を理論と実践で学習することがとても役立っていると思っています。

語学相談員にとって生徒との対話も大切!

語学相談員として一人ひとりの子どもたちと関わる責任は重く、何の知識も持たずにできるものではありません。小学校教諭の免許を取得し、これからも小中学校での日本語教育に、より専門的に携わっていきたいと考えています。

久保さんは、こんな人!!

新城中学校　国際担当
山田久美子 先生

久保先生が日系社会青年ボランティアで赴任したパラグアイでの体験を存分に活かして、異文化をもつ子どもたちの中に飛び込んでくださること、それが一番大きいと思います。生徒たちが一番のぞんでいることですし、職員が一番望んでいることです。ご自身が体験してきたことを学校の中でどんどん生徒たちに伝えていただけるので、とてもありがたいですね。もう一つは学習面です。先生ご自身が外国籍の児童・生徒たちのことをよくご存じで、何を困っているのか、何を必要としているのかをよくわかっているので、具体的なアドバイスをたくさんいただくことができます。私たちはそのアドバイスを存分に活かして、生徒たちの力になっていきたいと思っています。これからも久保先生よろしくお願いします。いつも助かっています。

けん玉で届けたい、日本とモザンビークの子どもたちに最高の笑顔を。

JICA中部のある名古屋駅周辺は、高層ビルが建ち並び、その近代的な景観は活気ある都市、名古屋の象徴となっています。その中心部に位置するKTC中央高等学院。ここにけん玉を通して社会貢献するユニークな先生が勤務しています。けん玉日本記録保持者の窪田さんは、**KTC中央高等学院で理科の教員として勤務**し、選択性の授業ではけん玉を教材に活用。けん玉をもっと日本に普及させ、モザンビークに学校を建設することを目標に「KTCけん玉夢基金」を設立するなど、国際交流の懸け橋となるべく活動しています。

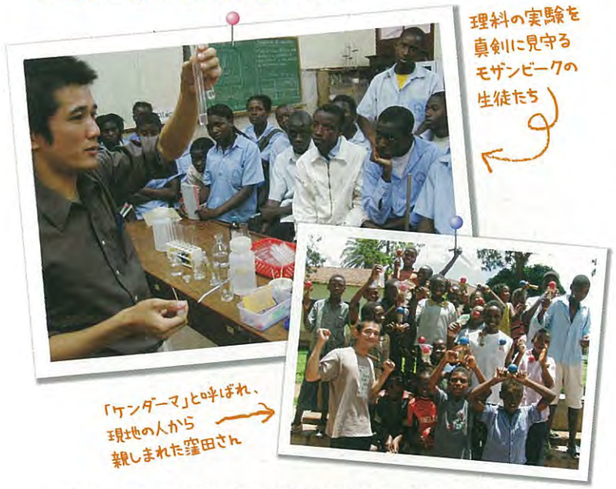
窪田（くぼた） 保（たもつ）

KTC中央高等学院教員、けん玉日　本記録保持者、青年海外協力隊経験者（モザンビーク・理数科教師）

けん玉日本記録保持者の窪田さん。大学在学中にけん玉という競技に真剣に取り組み、けん玉を通じて、モンゴルでの交流会やヒッチハイクでの日本一周の旅を経験。多くの人のやさしさに触れ、「間接的でもいいから恩返しがしたい」との気持ちを胸に青年海外協力隊に参加しました。

➔心の距離を縮めてくれたけん玉。

理数科教師としてモザンビークに赴任し、中学校で理科の指導をしていました。理科に興味が持てるように理科実験を広めるというのがミッションでした。理科室ができたということで赴任したのですが、現地に行ってみると理科室に実験機材はあっても、何年も引き出しや棚に放置された状態。機材はあっても使える人がいないということが問題になっていたのです。**物も必要ですが、人の重要さを改めて実感**しました。



理科の実験を真剣に見守るモザンビークの生徒たち

「ケンダーマ」と呼ばれ、現地の人から親しまれた窪田さん

モザンビークでは、教科書もないので、先生が黒板に白いチョークで書いていくことだけが、理科のすべてなんです。だから、実験して指示薬の色が変わったというだけで、ものすごく驚くんですよね。簡単な実験で、水素を集めてマッチで火をつけてポンと音を出すと、もう悲鳴が上がるんです。理科がおもしろいものなんだというのは感じてくれたかな、と思っています。

モザンビークの人たちとの距離を縮めてくれたのはけん玉でした。毎週末、各地域の小中学校を訪問しながら、けん玉教室などを開いていました。だから、私の名前は「ケンダーマ」。「たもつ」という名前が呼びにくいこともあり、村を歩けば遠くから「ケンダーマ」と呼ばれる。けん玉があったから、子どもを中心に現地の人たちと仲良くなれたのかもしれません。

もともと青年海外協力隊に参加しようと思ったのも、けん玉をはじめたことが影響しています。モンゴルでけん玉交流に参加したとき、現地で活躍する日本人の姿に大きな感銘を受けました。大学3年の夏には、けん玉を全国に広めようと、ヒッチハイクで日本一周を計画。そのとき、たくさんの人に助けてもらったんです。**間接的にでも恩返しをしたい、世界にけん玉を広めたい、その夢がかなえられるのが青年海外協力隊**でした。

帰国後、窪田さんは不登校を経験した生徒などが多く通うKTC中央高等学院で理科の教員として勤務。けん玉を活用した選択制の授業や、協力隊での経験を糧に、悩みを抱える生徒たちの心に寄り添う指導で、生徒たちの信頼を得ています。

➔悩んでもいい、人と違ってもいい。

協力隊では教員をしていましたが、最初から教員に限定していたわけではありません。何をしようかゼロから考えたとき、どうしても譲れない点がありました。「けん玉を活かした何かがしたい」ということ、アフリカの大自然で生きる子どもたちのたくましさに感動したこともあって、「自然を使った教育をしたい」ということ。その点、選択制の授業があり、提携している屋久島おおぞら高校（広域通信・単位制）でスクーリングを実施しているKTC中央高等学院は自分にとって最高の場所でした。

海外では、言葉も、文化も、考え方も違うため、思い通りにならないことも多く、**協力隊に参加したことで、不登校を経験した生徒たちの悩んでいる気持ちがわかるし、悩むことが間違いではないということも、ものすごくわかる**んですよね。悩んでもいい、人と違ってもいい。人それぞれいろんな道があって、いろんな価値観があるということも、自然に受け入れられるんです。進路を考えるとき、これくらい勉強ができるから、こういう大学に入って、こういう就職がある、そういう考え方ももちろんありますが、それ以外の選択肢を手伝えると思っています。

けん玉を使った選択制の授業では、けん玉ができるようになっていく、その一歩一歩をともに喜べるようになりました。けん玉をやっていると、小さい子から大人まで一緒になって遊ぶんですよね。同年齢で、**横のつながりがあっても縦に文化を継承できない、人と関わることが苦手な子どもが多い、そんな現代が抱える問題は、昔ながらの遊びで解決できる**と考えています。

小学校や保育園へ、けん玉のイベントに生徒を連れて行くのですが、引っ込み思案で人前で声を出すこともできなかった生徒が、けん玉を通じて拍手をもらったり、最後にお礼を言われて帰ってくる、すると、生徒たちがものすごく喜んでくれるんです。そういう体験をサポートできるのは、協力隊での経験があったからだと思っています。

けん玉教室で指導をする窪田さん

子どもから大人まで夢中にさせるけん玉

けん玉をもっと日本に普及させ、モザンビークに学校を建設することを目標に設立した「KTCけん玉夢基金」。窪田さんの活動は、いろんな人との輪をつなぎ、着々と広がっています。

➔夢をかなえる「KTCけん玉夢基金」。

2008年10月からは、けん玉の売上金の一部を基金として、モザンビークに小学校を建設する**「KTCけん玉夢基金」**をスタートしました。モザンビークでは、1992年まで続いた内戦により、多くの学校や病院などが破壊され、現在も65万人以上の子どもたちが小学校に通うことができずにいます。日本から見れば不自由な環境に生きる子どもたちですが、その表情は明るく、笑顔も屈託がありません。その一方で、日本の子どもたちは、恵まれた環境にありながら、時間を忘れて遊ぶ機会は少なくなっています。

けん玉のような昔ながらの遊びは、五感を使って、仲間が輪になって、年齢の違う者同士が一緒になって楽しめるものです。昔ながらの遊び文化を広めるとともに、けん玉を販売することになり、それならもう一歩先の貢献ができないかと考えたのが「KTCけん玉夢基金」です。

モザンビークでの教え子が小学校の先生になりたいという夢をかなえました。しかし、食料もない、給料も払われない、過酷な状況で泣きながら先生をやめてしまったという話を聞いて、そんな彼の夢を再びかなえたいという思いもあります。

だから「けん玉基金」ではなく「けん玉夢基金」。**日本人が忘れかけている「遊びの文化」を日本の子どもたちに、「学びの場」をモザンビークに提供し、遊びの文化と学びの場をけん玉を通してつなげたい**と考えています。

最近では、駐日モザンビーク大使をイベントに招いて、モザンビークの現状や教育の問題について紹介した後、けん玉で楽しく遊ぶイベントなども開催。けん玉のイベントが、モザンビークのことを知ってもらう一歩となっています。このような計画は、自分一人では実現できないことなので、地域の人たちやモザンビークの人たちとも協力して、日本中の人、そして、モザンビーク中の人とつながれたら、うれしいですね。これからも、日本とモザンビークの子どもたちに笑顔を広げていきたいと思っています。

けん玉の技をイベントで披露する窪田さん

全国各地でけん玉のイベントを開催

窪田さんは、こんな人!!

KTC中央高等学院
古川泰久 ゼネラルマネージャー

キャリアデザインプログラムのプロジェクトリーダー的な役割をお願いしています。青年海外協力隊では、いろんな子どもたちと接点を持って活動してきたと思うのですが、多様な個性の生徒が集まるKTC中央高等学院で、学校としてどのように次のステップへ踏み出してほしいのかを伝えるという点で非常に力を発揮してくれています。いまの子どもは変わってしまったといいますが、基本的には昔と同じです。ただ、社会が「なりたい大人モデル」を提示できていないのが、いまの世の中でしょう。窪田さんは、「なりたい大人モデル」は世の中に必ずあるということを、生徒たちに少しでも感じてもらうために、「なりたい大人モデル」を見せつつ、社会に出るためのステップを考えるカリキュラムをつくる中心的な役割を担ってくれています。

子どもたちが世界を身近に感じ 世界を知ることが 日本を知ることにもつながる。

中部圏の重要なIT拠点となる岐阜県大垣市にある情報科学芸術大学院大学の大学院生として、情報コミュニケーションの研究を続ける古川さん。青年海外協力隊での経験から、国を越えた子どもたちが出会うことで生まれる「生きた学び」の大切さを実感したといいます。現在、「青年海外協力隊と国際理解教育の連携の可能性」をテーマに修士論文に取り組む一方、アートマイル壁画プロジェクトのコアメンバーとして**国際理解教育に取り組む学校をサポート**しながら、日本の学校の教室と国際協力の現場をつなぐ活動を行っています。

古川（ふるかわ） 浩一（こういち） ← 情報科学芸術大学院大学修士課程/ジャパンアートマイル中部センター長、青年海外協力隊経験者（シリア・視聴覚教育）

古川さんはアメリカ同時多発テロ以降の国際紛争を契機に、青年海外協力隊を志望。赴任したシリアでは、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の教育開発センターで、現地の先生を対象に教材作成のためのワークショップを開催できる人材を育成したり、パレスチナ難民の子どもたちと日本の子どもたちを結ぶ国際交流事業にも参加しました。

→ インターネットで広がる国際交流。

かつて、イスラム圏の国々を旅したときに、いろんな人たちに出会ったんです。とても親切にしていただいて、**その地域を思うとき、忘れられない「顔」が浮かぶ**ようになっていました。そんなときアメリカ同時多発テロが起こり、アフガニスタン、イラクでの戦争へと広がっていきました。「自分にできることはないだろうか?」と思ったとき、青年海外協力隊のポスターを見て、その地域で働けると知って応募しました。

視聴覚教育隊員としてシリアのパレスチナ難民キャンプで活動したのですが、ちょうど赴任先のシリアの学校にネットワーク環境が整いつつあった時期で、まず興味を持ったのが「現地でインターネットをどのように活用しているか」ということでした。現地の先生たちにインタビューしたのですが、だいたい検索エンジンやメールの使い方など、子どもたちがネットカフェで普通にしているようなことだったんです。それも基本ですから大事なことですが、**世界に自由に行くことができない難民の子どもたちにとって、もっと世界とつながるためにインターネットを活用できないか**と考えました。

最初に考えたのが、パレスチナと日本の子どもたちの絵が一緒に展示されている「ウェブ美術館」です。実現するにはどうしらよいか、仲間といろいろ話すうちにどんどん広がって、**パレスチナ難民の子どもたちと日本の子どもたちが一緒に大きな絵を描くという「アートマイルプロジェクト」**につながっていきました。インターネットを使って、まず自己紹介をする。大きな絵の半分をパレスチナ難民の子どもたちが描いて自分たちの生活や文化を紹介する。絵が乾いたら日本に送り、日本の子どもたちが残り半分の絵を描いて一枚の絵として仕上げる。**日本の子とパレスチナ難民の子が知りあい、ともに学びあい、存在を近づけあい、そして、他人じゃなくなっていく**。そんな経験をサポートする中で、この活動にはすごく可能性があると感じました。

国を越えた子どもたちが出会うことで生まれる「生きた学び」の大切さを実感した古川さん。子どもたち自身が世界を身近に感じ、世界に興味を持つことが日本を知ることにもつながるといいます。

→ 国際協力の現場と教室をつなぐ。

インターネットは存在と存在をつなげるメディアです。最近、意欲的に取り組んでいるのが、インターネット通話を活用して、海外にいる青年海外協力隊員と日本の学校の教室をつないで、現地から出前講座を行う取り組みです。協力隊員が話しをするだけでもよいのですが、リアルタイムで現地とつなげば、現地の人とも話しができるわけです。これはぜんぜん違う経験で、子どもたちが考える深さやモチベーションの上がり方がすごいんですよね。

シリアで視聴覚教育隊員として活躍する古川さん

日本に送る絵を描く子どもたち

海外の隊員と結んだ、インターネット通話による出前講座

インターネットを自在に活用する古川さん

単純に現地とつなぐだけではいけないので、たとえばこの前はパナマでしたが、事前に1時間ほどパナマについてアイデアを出しあい、どんなイメージを持っているか、アイデアマップのようなものを作成しました。その上で現地とつないで、みんなの共通意識を「こんなふうに思うのですが?」と、現地の人に問いかけたら笑われてしまった、なんていう体験もあります。

最近は、人間にとって最小のコミュニティである「家族」をテーマにした企画にも取り組んでいます。途上国では家族の仲が非常に良いのですが、家族という面では日本の方が問題は深刻です。**海外という「鏡」を持つことで、自分たちを見直し、つながりあえるきっかけになる**と考えています。

こうした活動が順調にできるようになったのは、帰国後、JICA中部が行っている、国際理解教育に興味を持つ小中学校の教員が集まる「開発教育指導者研修」などに参加したことが縁ですね。中部4県の小中学校とつながりができたことで活動の幅が広がりました。協力隊の強いネットワークを感じましたね。

古川さんは、日本の学校と世界を結び、国際理解教育の可能性を追求。現在、「青年海外協力隊と国際理解教育の連携の可能性」をテーマに修士論文に取り組んでいます。

→ 世界と「つながる」ということ。

日本は恵まれています。世界にピラミッドがあるとすれば、日本は先端の方に位置する国。その日本の人たちのちょっとしたふるまいが全体に及ぼす影響というのは、すごく大きいんです。そのことを意識してふるまう必要があると思うんですよね。**一人ひとりが世界を意識して考え、行動を決める、そうすれば、一つひとつは小さなしずくでも、やがて川となって流れはじめます。**

シリアで交流プロジェクトを進めているとき、レバノンとイスラエルで戦争が起こり、日本の子どもたちは、隣の国で戦争が起こっていることをすごく心配しました。そのとき、Eメールで知らされたのですが、**日本の子どもたちが親よりも先に、朝、新聞を取りに行き、国際欄から開いて読んでいる**と。これはすごいことかもしれないと、感じましたね。

普通だったら、日本でそういう行動に出る子どもは少ないと思うんです。プロジェクトに**参加した子どもたちは戦争を「他人事」ではなく「自分事」として心配していました**。心配すると、聞きたいことも出てきます。それを現地の子どもたちに聞くこともできます。個人的な意見なので、新聞などマスメディアの意見とは違いますが、確実に質の高い情報を得ることができるんです。一人の人間がそこに生きていて、すごく悲しいとかくやしいという意見かもしれないし、意外にクールだったりするかもしれない、その情報の影響は大きいですよね。戦争というと極端な例ですが、南の島の温暖化問題でも、いろんな可能性があると思います。伝えたいから英語を学ぶ、日本のことを調べる、そこには主体性のある学びが生まれます。**日本の子どもたちが世界と「つながる」**。そのたった一つのことから、工夫しだいで無限の可能性が引き出せると感じて、すごくわくわくしています。

こうしたプロジェクトに**参加した子どもたちが、ある国を思うとき、具体的な「顔」が浮かぶようになる**こと。**そして自分の人生と交流相手の人生が「つながっている」と感じられる**こと。そんな国際理解教育の可能性を追い求めています。

自身の活動について小中学校で出前講座をする古川さん

古川さんは、こんな人!!

大府東高校　山本孝次 先生

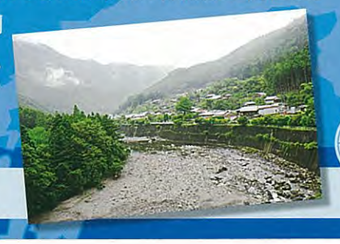
古川さんとは、2008年のJICA中部主催「開発教育指導者研修・上級者編」で出会いました。インターネットを使ってどうやって国際交流しようかという相談をしたり、映像の編集をお願いしたり、そういう頼れるスペシャリストといった面があります。もうひとつ、これもまたすばらしいのですが、他の協力隊OBや違う経験を持つ方と、私や私の教えている生徒たちを引き合わせてくれる、私にとっては国際交流のコーディネーター的な人です。私は教員ですが、古川さんは協力隊のOBなので、いろんな国で活動する協力隊の方たちと私たちを結びつけてくれて、途上国の子どもたちとも関わりを持つようになり、とても活動の幅を広げてくれました。開発教育・国際理解教育、そして国際交流の実践者というのが私から見た古川さんです。

地域を学ぶことで新しい社会を考えるきっかけにしたい。

大西（おおにし）　かおり

大杉谷自然学校校長、青年海外協力隊経験者（フィリピン・理数科教師）

近畿の秘境と呼ばれ、日本一水質が美しいといわれる清流・宮川の上流域に位置する大台町の大杉谷地域。人口は315人（2009年4月現在）。そのうち65歳以上の高齢者が約66%を占める過疎高齢化の進んだ限界集落です。その大杉谷地域で、大西さんは廃校になった小学校の校舎を利用して、**「NPO法人大杉谷自然学校」を設立**。「培われてきた日本人の自然観や価値観」を次世代に伝える役割を担い、「持続可能な新しい未来の創造」に寄与することを目指し、環境教育プログラムをはじめ、さまざまな活動を展開しています。



小学生のとき、新聞で見つけた青年海外協力隊の特集記事を読んで、「いつかは私も参加したい!」と思っていた大西さん。それから10年以上思い続けていた夢を大学在学中にかなえます。大学4年のときに青年海外協力隊に応募し、理数科教師としてフィリピンへ派遣されました。

➔幸せの価値観とは?

現地ではフィリピンの先生に対して、理数科教材の使い方の指導や、教材を使った教育プログラム開発などを、島々を巡回しながら行っていました。巡回といってもフィリピンは島国なので移動だけでも大変。でも巡回して指導していくというスタイルだったからこそ、いろいろな人や文化に触れることができたのだと思っています。島々を巡るうちに、いろんな人とのふれあいを通して「幸せの価値観」について考えるようになっていました。

フィリピンの島々を巡り、教材の使い方などを指導していた大西さん

猟師さんに会うと、ぜんぜん現金収入がなく、日々、魚を獲って食べたり、ちょっとフルーツを取って食べたりという暮らしをしているんですけど、それでもすごく幸せそうなんです。子どもたちも学校に行けない子がたくさんいるんですけど、物を売って働くとか、子守とか、家の手伝いをするとか、そういうことでも生き生きしているんです。**経済の発展レベルと人が幸せを感じる基準とは必ずしも比例しない**な、と思いました。

3年間のフィリピンでの活動、そして生活。人とのつながりの中で、まったく知らない人の結婚式に呼ばれたこともありました。日本では失われつつある人と人との温かいつながりを感じ、開発援助の必要性があることは間違いないけれど、**実際に学ばなければいけないのは私たちなのではないか**と思うこともありました。

任期を終え帰国した大西さん。教育学部を出てフィリピンで理数科教師をした経験、自然豊かなフィリピンで感じた地域の人のつながりや、家族を大事にする心。「教育」というキーワードに「地域」「自然」「幸せ」が加わり、大西さんが生まれ育った大杉谷地域に自然学校を設立し、活動していくことを決めました。

➔やっぱり自然の力はすごい。

フィリピンに行って、自分が住んでいた大杉谷地域こそ、本当はいろんな人たちとのつながりがあったりとか、自然との関係があったりとか、そういったいろんな大事なものが詰まったところじゃないかと感じるようになって。フィリピンに行ってはじめてそのことに気づいたわけです。

帰国後は、**「自分の生まれた故郷に住み、社会に貢献しながら、食べていける仕事をする」**ことを目指し、1年半くらい悩み続けた結果、「地域で自然学校を作る」ことにしました。2001年には「大杉谷自然学校」を設立。2007年に法人格を取得し、「NPO法人大杉谷自然学校」となりました。

自然学校というのは、主に自然や地域、環境などをテーマに環境教育プログラムや自然体験活動を提供しているところです。私が運営する大杉谷自然学校では、**地域に残る自然や伝統文化、自然と共生していた頃のライフスタイルを再評価し、地域の自然や人々の知恵を活かしたさまざまな環境教育プログラムを提供**しています。具体的には、民泊体験やキャンプ、エコツアーなどを展開しています。

その一つが子どもを対象とした「大杉谷孫さんクラブ」。休みの日に田舎のおばあちゃんやおじいちゃんのところに遊びに行く気分が味わえるプログラムです。「おばあちゃんとトチ餅づくり」では、昔から地域で作られているトチ餅づくりを通して、子どもたちと地域のお年寄りがふれあい、「秋だ!新米ご飯炊き」では、山に出かけての薪拾いから、ご飯炊きを体験しました。その他にも、地域に伝わる伝統漁法である「しゃくり」による鮎漁や、自然観察をしながら山を登る、ただの登山では終わらない「大人のエコツアー」など、子どもから大人まで幅広い世代を対象にした環境教育プログラムは、家族のふれあいや子どもたちの情操教育、企業の研修にも活用されています。

山登りを通じた自然教室、子どもたちに丁寧に説明する大西さん

環境教育プログラムを体験した人は、みんな生き生きとした笑顔で帰って行かれるんです。そんなとき、やっぱり自然の力はすごいなぁ、と思います。でもその体験が単なる思い出だけでなく、地域のことだったり、自然のことだったりを、考えるきっかけになってくれれば、うれしいですね。

大西さんが設立した自然学校のさまざまな取り組みは、現在では広く知られるようになり、「地域活性化の成功例」としてメディアなどに取り上げられることも増えました。

➔一人ぼっちにならない社会を。

「地域活性化の成功例」と言われても、実際には難しいんです。高度成長期や主幹産業である林業の不振から、この大杉谷地域からも多くの住民が離れていきました。私たちが活動をはじめてからも、大杉谷地域ではどんどん高齢化が進んでいます。この地域で活動した9年間で、高齢化率は約66%、まわりは70代、80代の方ばかりになってしまいました。

この活動を通して、皆さんに知っていただきたいのは、**日本の地域は激変期を迎えている**ということです。過疎化や少子化が激しく、人口の半数以上が65歳以上の高齢者になり、そこでの生活の維持が困難になっている集落を「限界集落」といいますが、日本各地の地域が限界集落に達しています。**あと10数年で消滅してしまうかもしれない状況**となっているのです。

ある程度の人口を増やす、特に若い世代を限界集落に呼びこまないと、本当の意味で元気な地域は取り戻せません。だから、私たちが唯一できている地域活性化は、70代、80代の方ばかりの地域に、他の地方の出身者である大杉谷自然学校の若いIターンスタッフが生活しているということなのかもしれません。

私が活動していた**フィリピンには、お金より大切なものがたくさんありました**。家族のきずなや地域の助けあい、自然から恵みを得る生活。そこには貧しくとも輝く人々の笑顔がありました。**帰国し、故郷を見たとき、田舎には同じものがあると感じた**のです。地域には本当にすばらしい、現代の社会が忘れていってしまうようなものが、たくさん残されています。ですから、いまでは自然学校の活動を通して、**地域のすばらしさであるとか、地域の重要性を伝えるということに使命感**を持っています。

自然から恵みを得ていた世代の心を引き継いでいる人々、地域に残る神様に自然に手をあわせてしまう人々、そんな「ネイティブ・ジャパニーズ」ともいえる、すごい日本人たちが地域には住んでいます。いまのうちに、この「すごい日本人たち」から、直接、いろんなことを学び、受け継ぐために、ぜひ日本の地域社会を訪ねてみてください。

私が目指すのは、**人が一人ぼっちにならないような社会**です。地域を学ぶことで、人とのつながりをすごく大事にする、そんな新しい社会が生まれてきたら、と思っています。

大西さんは、こんな人!!

NPO法人大杉谷自然学校スタッフ
西村博美さん

海外での経験で身につけたものかはわかりませんが、大西さんにはびっくりするような行動力があると思います。普通だったら、先の見えないことに対する行動っていうのは躊躇するのに、「まずやってみよう」っていう、そういうところはすごく尊敬しますね。いまは、わずか数名でやっているこの環境教育事業ですが、きっといつか体験した子どもたちが大きくなったときに、新たな風が吹くって静かな予感が自分の中にあります。だから、本当に慎ましやかな活動でも、ずっと一緒に続けていきたいと思っています。